

G・オーウェルにおける
「人間らしさ (decency)」の観念

小 沼 堅 司

J・アトキンスは、その優れた著作『G・オーウェル——文学的・伝記的研究——』(John Atkins, *George Orwell; A Literary and Biographical Study*, Frederic Ungar Publishing Co., New York, 1954.)の冒頭において、あたかもみずからの研究の基本的視点を開示するかのよう、オーウェルの全著作を貫く共通の要素は人間的品位の感情であると述べている。品位(ディセンスイ)は英語における最もあいまいな言葉の一つであるが、この英語の表示義(コンテション)はオーウェルの愛した伝統的なイギリス人の生活と態度の複合物に基づいていた。この言葉は、彼の小説(とくに『空気を求めて』)や、文学評論(とくにディケンズ論)、新聞・雑誌に書いたたくさんの論説などを貫ぬくキイ・ワードであると同時に、『1984年』や『動物農場』などの政治的テーマを文学にまで高めた小説、さらにスペイン戦争の真実の経験を報告しようとした『カタロニア讃歌』における彼の政治思想の存立根拠でもある。言い換えれば、私たちがこれらの作品や多数の評論・論説におけるオーウェルの政治思想を解読するさいの最も重要な手掛りはこの言葉であり、また、彼が実生活においても貫ぬこうとした人間的品位の感情への共感の姿勢である。人間的品位の感情とそれへの共感こそ、失われつつある過去と到来しつつある新しい社会、権力の言葉と民衆の生活、国家理性と個人の自由、階級社会と平等、民衆の暮しぶりの流儀のなかから自然に生れる「愛国心」(パトリオ

目 次

G・オーウェルにおける「人間らしさ(decency)」 の観念	小沼堅司	1
<編集後記>		30

ティズム)と権力崇拜を核とする「ナショナリズム」との区別など、オーウェルの広範な主題群を考察し理解するさいの決定的に重要な言葉であり態度であった。

オーウェルのユニークさは、彼が知識人の精神と庶民の感情を併せ持っていたことであった。そして知性と感情が対立する場合には、なぜなのかを問い、自己の理論や思想が自己欺瞞や偏見に基づいていないかを反省した。彼の場合、その対立は——一般的に言えば——我々の文明は知性に基づいているが、感情あるいは品位によって洗練されていない知性は、品位(感情)に基づく文化と品位そのものを破壊してしまうであろうという形態をとった。彼はこの点だけでも他の知識人と闘った。最晩年の著作『1984年』は、この対立の構造における敗北感に基づいていた。そこで描かれている世界は、2プラス2がいくらになるかは支配者の欲するままに決められるような世界であり、権力によって後押しされた知性の勝利者の世界であった。現代の知性は権力への渴望によって特徴づけられるが、人間的品位の感情は何よりも自由を欲する。しかもこの状況は、自由も権力もしばしば目的を達成するのに同一の言葉の武器を用いるがゆえに、より一層複雑となっている。オーウェルは、権力渴望者(パワー・モンガー)たちがしばしば、そしていとも容易に、自分たちは真の自由を追求しているのだと他人に説得できたことに注目した。だが彼らが、洞察力ある人々を盲目にすることができない一つの媒体があった。すなわち、文学表現である。友人P・ポッツによれば、オーウェルの表現の簡潔な明晰さは、彼の人間らしさの感情に裏打ちされた道徳的自由の探究の直接の帰結であった。人は多くのことを隠蔽することができる。しかし、その人の表現スタイルを隠すことはできない。

オーウェル自身は、創造的に考える能力はこれらの思想を明晰に表現する能力を含んでいる、と説明するであろう。すなわち、目的は手段を条件づけるということ、もし人が実際に権力よりも自由に関心を払うならば、その関心を表現するのに用いる言語は当該対象となんらかの関係をもつであろうということである。注目に値することであるが、権力欲求のために言語を用いる人々はマシン・ガンの引き金を引くような仕方を書くのである。

(Paul Potts, "George Orwell", *London Forum*, 1949.)

オーウェルは、物事があるがままに見ようと努めた人だった。既成の正統理論や「イズム」の色眼鏡を通して事実を隠蔽したり改変して、その結果、巨大な嘘の体系を築き上げることにどうしてもがまんがならなかった。彼は1946年の重要なエッセイ「ペンの自己規制」のなかで、スペイン戦争以来の10年間の経験を回顧して次のように述べている。「平明な力強い言

葉で書くには、恐れ憶することなく考えねばならない。そして恐れを知らずに考えるならば、政治的には正統ではあり得ない。」(“The Prevention of Literature”, *Polemic*, No.2, January 1946, in: *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, vol. IV, Secker & Warburg, 1968.) 平明で明晰に書くというオーウェルの散文の精神は、全体主義政治（ファシズムとスターリン主義）における無謬性の神話や歴史の捏造などの巨大な組織的嘘の体系を暴かざるを得ないという意味で、彼の異端の姿勢と連なっていた。全体主義の観点からすれば、歴史は客観的の真実の記録であるよりは創られるものである。全体主義国家は現代における一種の「神政国家」であり、聖なる序列（イエラルシ）をなす支配層はその権力地位を維持するためには無謬でなければならない。それ故、方針の大転換や権力闘争のたびごとに、歴史的評価の変更や理論の改変が要求される。そして、あれこれの誤ちは犯されなかった、架空の勝利は事実だ、不都合な事実が存在しなかった、ということを示すために過去の出来事を整理しなければならなくなる。その意味で、オーウェルの異端の精神は、全体主義の恐怖（テロル）政治に対する抵抗だけでなく、この恐怖支配を正当化するさまざまな政治神話や組織的な嘘の恐ろしさと、現実を直視しそして考えるわざ（アート）の大切さを一貫して訴え続けてきた。たくさんの文章のなかから一、二任意に引用しても、彼の訴えの内容を確かめることができる——

全体主義について真に恐ろしいことは、それが「暴虐」を働くということだけではなく、それが客観的真理という観念を攻撃していることである。それは未来だけでなく過去をも支配しようとする。（“As I Please”, *Tribune*, 4 February 1944, in: *The Collected Essays*, vol. III)

実際ナチスの理論は「真実」といったものの存在を特に否定する。たとえば、「科学」というようなものはない。あるのは「ドイツ科学」「ユダヤ科学」等々だけである。こうした考え方が密かにねらっているのは、総統とか支配層とかが未来だけでなく過去までも支配する悪夢のような世界である。総統がしかじかの事件について「そんなことが起らなかった」と言えば、さよう、それは起らなかったのである。総統が2プラス2は5だと言え、さよう、2プラス2は5である。私にはこうした見通しが爆弾以上に恐ろしい。（“Looking back on the Spanish War”, Autumn 1942, in: *The Collected Essays*, vol. II)

オーウェルは、スペイン戦争の経験から戦中・戦後まで一貫して、イギリス左翼知識人の

多くを捉えた無批判的なソヴィエト礼讃とスターリン崇拝を批判した。彼はこの崇拝熱のなかに、知識人自身における自由を希求する精神の衰退の深刻な徴候をみた。それは、正統思想という名の党派性への「精神的隷属」の結果であった。彼は、このような「精神的奴隷」性をいささかも疑おうとはしない恐るべき「誠実さ」と、その誠実さの裡にひそむ精神的荒廃を決して見逃さなかった。作家は政治的主題をとりあげるべきであるが、文学を単なる党派的な判断の下僕にしてはならない、というのが彼の立場であった。つまり、美や知性にかかわる誠実さを犠牲にしないで政治的目標と芸術的目標を融合すること、「政治的な文章を芸術に高めること」であった。（“Why I Write”, *Gungrel*, No.4, 1946, in: *The Collected Essays*, vol. I）オーウェルの診断によれば、多くのイギリス知識人の陥っている誤ちは、反全体主義者にならないで反ファシストになろうとしたことであった。彼は、なぜ全体主義と指導者崇拝が戦後にもさらに進むと考えるのかという一人の未知の市民からの質問の手紙に答えて、『1984年』の本質的な命題を含む重要な返事を書いたが、その一節で次のように述べている。「私の本『ライオンと一角獣』のなかでも説明したように、イギリスの民衆に対する私の信頼、自由をそこなわずに経済を集中させていく彼らの能力に対する私の信頼は、非常に深いのです。（中略）しかし知識人の思想は一般庶民よりも全体主義的だという事実があります。概してイギリスの知識階級はヒトラーに敵対していますが、その代価としてスターリンを受容せざるをえなかったわけです。たいていの知識人は、『われわれ』の側がやっていると感じている限りは、秘密警察、歴史の組織的偽造といった独裁的な方法を進んで受け入れる準備ができています。」（Letter to H.J. Willmet, 18 May 1944, in: *The Collected Essays*, vol. III）民衆の生活理性から切れ、「根無し草になった人間の愛国心」（「鯨の腹の中で」ともいうべき代替ナショナリズムによってソヴィエトに忠誠を誓った多くの左翼知識人にとっては、スターリンは神聖にして侵（おか）すべからざるものであり、その叡知を疑うことは冒瀆行為であった。強制的農業集団化や数次にわたる政治的見世物裁判などの結果引き起された数百万人に及ぶ大粛清は事実無根とされた（この時期の歴史統計はなお未開禁であるが、R・コンクエスト〔片山さとし訳〕『スターリンの恐怖政治（上・下）』の詳細な統計分析によればゆうに一千万人を越えている）。粛清という名の無数の処刑は、犠牲者たちは「異端」の思想を抱いた結果として体制に客観的に危害を及ぼしたのだからとして正当化された。インドの飢饉は公表すべきであるが、四百万人に及ぶといわれるウクライナの組織的な飢饉は秘密にするのが当然とされた。戦争は資本家たちによって引き起される意味のない殺戮であるといいながら、赤軍が問題になると、戦争は光輝に満ちた行為になり、兵士は士官を敬愛し敵を悪魔のように憎む幸福な戦士となる。共産主義者は、1939年9月以前の数年間には

ナチズムの恐怖を片時も忘れず、ヒトラー弾劾をおこなわなければならなかったが、それ以降の20ヵ月間は、ドイツは犯した罪以上の非難を受けていると信じなければならず、「ナチス」という語彙も印刷物から脱落しなければならなかった。しかし、1941年6月22日の朝8時のニュース以後は、再びナチズムが史上例のない忌まわしい悪であると信じなければならなくなった。要するに「精神分裂症的な思想体系を組み立て」（前掲論文「ペンの自己規制」）なければならなかったのである。オーウェルは、このような思想と言論の自由に対する正統左翼知識人の攻撃と生涯闘った。彼は、いわば数万の蓄音器が同じ音をがなりたてているなかで、人間の声を聞こうとしたのである。その際彼を支えたのは、少数の自立した知識人の友情と、誰れにでも自分の意見を言う権利はあると考える普通の人々（コモン・ピープル）（庶民）の「寛容と品位の精神」であった。オーウェルは、生前ついに使われることのなかった『動物農場』の序文である「出版の自由」の最後の一節で次のように述べている。

イギリスの知識人が臆病になり嘘もつかざるをえない理由がいくらかでもあることは、よくわかっている。それを正当化する理屈ならみんな暗記しているくらいだ。だが少なくとも、ファシズムに対して自由を守るといったばかりしい理屈は、もうこれ以上言わないことにしようではないか。もし自由になんらかの意味があるとするならば、それは相手が聞いたがらないことを相手に告げる権利をさすのである。庶民は今でも何となくこの主張に従い、それに基づいて行動している。わが国では、自由を恐れているのは自由主義者であり、知性に泥を塗らたがるのは知識人なのだ。私がこの序文を書いたのは、その事実を認識してもらうためである。（“The Freedom of the Press”, *Times Literary Supplement*, 15 Sept. 1972. 小野寺健編訳『オーウェル評論集』岩波文庫、1982年より引用。）

このような戦闘的自由の精神をもって、オーウェルは、「2 + 2 = 5（四年のうちに五ヵ年計画を）」という、強制収容所と粛清を隠蔽する政治算術や、決まり文句と死んだ隠喩を乱用してあたかもプレハブ小屋の部品のようにつなぎ合わされる文章を批判した。また彼は、例えば「ハイエナ、死体、下僕、盗賊、絞刑吏、吸血鬼、狂犬、犯罪者、暗殺者など」の罵倒用語や、「ファシズムのたこ」、「白鳥の歌」、「長靴はるつぽに投げ込まれる（軍は大改造される）」、「蹄鉄にかける」などの陳腐な隠喩を、それに「客観的反革命的左翼逸脱主義」とか、「プチブル的要素の徹底的破産」といったマルクス主義者の方言を多用してつくられる文章と思考の腐敗をどうしようもなく嫌悪した。それは「イギリス人が否認を表わすのに自然に用いるような言葉」では決してなかった。（“As I Please,” *Tribune*, 17 March 1944, in:

The Collected Essays, vol. III.) また彼は、スターリン全体主義政治における大粛清を擁護するイギリスの教授の言語における自己欺瞞を告発した。ぬくぬくとしたこの教授は、たとえば率直に、「そうすることによって良い結果が得られるなら、反対者を皆殺しにするのに私は賛成だ (I believe in killing off your opponents when you can get good results by doing so.)」と言うことはしない。その代りに次のように書く。「私は、ソヴィエト体制が人道的な人々が慨くかもしれないような若干の様相を呈していることを認めるのにやぶさかではないが、政治的反対の権利のある程度の削減は過渡期における不可避的な随伴現象であり、ロシア国民が忍ぶよう求められてきた困苦は既に具体的な成果の面において十分に正当化されてきたという点については、意見の一致をみるにちがいないと思う。(While freely conceding that the Soviet regime exhibits certain features which the humanitarian may be inclined to deplore, we must, I think, agree that a certain curtailment of the right to political opposition is an unavoidable concomitant of transitional periods, and that the rigours which the Russian people have been called upon to undergo have been amply justified in the sphere of concrete achievement.)」 (“Politics and the English Language”, *Horizon*, April 1946; *Modern British Writing* ed. by Denys Val Baker, 1947, in: *The Collected Essays*, vol. IV.)

オーウェルは、このようなヒトラーとスターリンの全体主義を典型例として、現代の政治言語が、擁護できないものを擁護しようとして示す「曖昧性」、「論点回避」、「婉曲法」を批判した。現代の政治の言葉は、たとえば無防備の村落が空から爆撃されて、住民や家畜や家が機関銃や焼夷弾で焼き殺されることを「平定 (pacification)」と称し、何百万もの農民が農場を奪われてとぼとぼと道を歩かされることを「住民の移送 (transfer of population)」とよび、人々が裁判抜きで投獄されて、ある者は人知れず処刑され、ある者は極寒の地で飢えと病気で死ぬことを「好ましからざる分子の除去 (elimination of unreliable elements)」といいくるめるのである。(Ibid.)

オーウェルは、嘘を本当と思わせ、殺人を必要あるいは正当であるかのように言いくるめ、空虚のものを内容のあるもののように見せかける権力の言語に対して、普通の人々 (コモン・ピープル) の日々の生活流儀に根ざした人間的品位の感情と、この感情への共感能力とに裏打ちされた道徳的自由の精神によって闘ったのである。彼は弁解の余地のないものを弁解しようとする死語の用法や墮落した既成の政治用語に対して、明晰な思考と明晰な表現を救い出そうとした。彼の奨める、簡潔ではあるが意味の明瞭な、しかも生き生きとした文章を書くための経験則は、核兵器の恐怖の均衡による平和という条件の下で核軍拡を正当化する政治用語が氾濫する現代 (たとえば、恐怖の均衡による平和を「非道徳な」平和と断罪して S D I = 戦略防衛構想を正当化するレーガン大統領

領の政治レトリック。そこでは核兵器を廃絶するための非核兵器であると称して、X線レーザーやガンマ線レーザーの製造のための核爆発を正当化しようとする) にあって、私たちに明晰に考え表現することの大切さを教えている。この簡潔で明晰な文章の経験則は次のようなものである。

活字で見慣れている直喩や隠喩やその他の修辞法を使わないこと。短かい言葉で用が足りるときは、長い言葉を使わないこと。不必要と思われる言葉があったら削除すること。能動態で言えるときは受動態を使わないこと。日常的な英語の言葉で表現できるのなら、外国語の言い回し、科学用語、訳のわからぬ単語などは用いないこと。(“Politics and the English Language”, *ibid.*)

野蛮なことを言うくらいならこれらの規則を破った方がよい、という但し書きの付いたこの文章の規則は、言語の文学的使用のためのものではなく、ごまかしと曖昧さ、陳腐なイメージ、考えを隠したりはばんだりする虚偽を締めだすためのものだ。オーウェルの散文の精神はそうしたものであった。

オーウェルは、全体主義政治による言葉の歪曲と思想の統制に対して、簡潔、具体、平明、直截な言葉の力によって闘った。彼の散文の精神が示しているように、平明で力強い言葉で書くことは、自由な思考、つまり恐れ憶することなく考える能力を培う。そして自由に考える能力は、全体主義権力の強制する思想と行動の統制に反撥する。全体主義による思想(言葉)の統制は、人々がある思想を考え表現することを禁ずるだけでなく、何を考えるべきかを命じ、行動の規範を設定するとともにその感情生活をも支配しようとする。そのとき、自主的な個人は存在を許されなくなるばかりでなく、個人が自主的でありうるという幻想さえもてなくなる。それは、文学が不可能であることを意味する。創造的衝動と知的誠実を破壊するからである。その意味で30年代の多くの作家、詩人が反ファシズムの闘いに立ちあがったのも当然であった。だが、反ファシズムの思想や行動が、もう一つの憎悪の無窮運動に陥いるとしたらどうなるのか。反ファシズムの情熱がもう一つの全体主義国ソヴィエト・ロシアへの国家主義的忠誠を——無意識であれ意識的であれ——強いるとしたら。オーウェルは、このもう一つの自己欺瞞を文学と思想の問題として考察した。それは、スペイン戦争という経験の学校で学んだ「政治」についての認識の延長でもあった。20世紀最大の政治的作家オーウェルの誕生にとって、それは不可避の問題であった。

1937年、スペイン内乱に参加し、独立左翼系の政治団体POUM(マルクス主義統一労働

党) 派の民兵として戦ったオーウェルは、カタロニアで共産党によってPOUMが「ファシズムの手先」、「フランコの第5列」として弾圧を受け、壊滅状態に追い込まれるとともに、かれ自身と妻アイリーンも家宅捜索を受け逮捕・拷問の危機をかろうじて免れるという事件を通じて、全体主義政党とそれを貫く思考様式の恐しさを身をもって経験したのだった。それ以来、人間的品位(ディンススイ)と平等の価値を破壊して「人間の顔を永遠に踏みつぶす長靴」のイメージは、オーウェルにとって全体主義体制の恐怖という政治的イメージであるだけでなく、個人的な悪夢の象徴ともなった。それはまた、普通の人々(コモン・ピープル)の人間的なまともな(セイン)心を食いやぶる残忍な政治の象徴でもあった。たとえば、『空気を求めて』(1938年)の主人公ジョージ・ボウリングは、ある日の夜左翼ブック・クラブ主催の反ファシズムの講演会に出席して、講師がファシズムの脅威と非人間性を「レコード盤のように」声高に指摘しつつ人々の憎悪をかき立てるといふ光景をまのあたりにして、どうしようもない異和感を感じる。まるで「クリームでもかき回して作り出す」ように政治的な死語のスローガンを次から次へと並べ立てながら、ファシズムに対するむきだしの憎悪へと人々の心を流し込もうとする講演者について、主人公は次のように想像する。

彼は本気でそう思ってるんだ。少しもごまかしはしていない——しゃべっている一語一語、それを痛感しているのだ。聴衆の心に憎悪の感情をかき立てようと努めているが、彼自身が身をもって感じている憎悪に比べればものの数ではない。スローガンはどれもこれも彼にとっては福音書にあるような真実なのであろう。もし彼のふ分けをしてみれば、そこに出てくるのはただデモクラシイ、ファシズム、デモクラシイだけだろう。私生活中のそんな男を知るのはおもしろい。しかし彼に私生活なんてあるのだろうか？ 私生活なんかはなくて、ただ演壇から演壇へと渡り歩き徐々に憎悪をあおり立てているだけではなかろうか？ 多分彼が夢をみる時でさえスローガンしかでてこないであろう。(G.Orwell, *Coming Up For Air*, Secker & Warburg, 1963. 小林歳雄訳『空気を求めて』, 晶文社, 1984年より引用。ただし、引用にあたって訳文は変えてある。以下同じ。)

主人公は、一時間くぎりの「人間の手回し風琴」の宣伝のすさまじさにたじろぎ、講演のコトバを聴くことを止めてしまう。「凶暴なる残虐行為……憎むべきサディズムの激発……ゴムの警棒……収容所……ユダヤ人に対する不法なる迫害……中世暗黒時代への逆行……ヨーロッパの文明……手遅れになる前の行動……恥を知るあらゆる民族の公憤……各民主国家の同盟……断じて退くな……民主主義防衛……デモクラシイ……ファシズム……デモクラシイ

……ファシズム……デモクラシー……」これらの死んだコトバは、彼の心の中ではなく頭蓋骨の中に入りこみ、びんびんと脳を打ち続けるだけであった——憎め、憎め、憎め、皆んな一緒になって憎悪せよ。その時ふと目を閉じた。奇妙な感じであったが主人公が相手のなかに入った。講演者の声だけが聞える方がはるかによくその人間が分るような気がした。そして一瞬、彼がひしひしと感じていることを身にしみて感じる。

私にはこの話し手がなにをみているかが分った。彼がみていることは、語る事ができるといったようなものではなかった。この男がこの時口にしていたのは、ただたんにヒトラーが我々を狙っている、我々はすべからく団結しヒトラーを憎まなければならない、ということにすぎなかった。具体的なことには立ち至らず、すべてご立派な表現に終始していた。だが、彼が思い描いているのはまったくちがったものだった。彼がみていたのは、自分がスパナを使って人々の顔を打ち砕いている光景だった。もちろんファシストの顔である。この男がみているのはこれだ、ということが私にははっきり分った。私が彼の中に入りこんでいた一秒か二秒のあいだに私自身がみたのはまさにこのことだった。やっつけろ！ どまんなかをだ！ 顔の骨が卵の殻のようにへこみ、つい先ほどまで顔であったものがイチゴジャムの大きな球体のようになる。やれ！ そらもう一度！ これがこの男の心の中で思っているものだ。寝ても覚めてもこのことを考えていて、考えれば考えるほどこれが気に入るのだ。それですべてOKなのだ。なぜならたたきつぶされたのはファシストの顔なのだから。この男の話をきいていると、こう心のなかでいっているのが分るようであった。(前掲訳書)

非人間性に対するむき出しの憎悪——そこには奇妙な逆説がみられる。この熱烈な反ファシストの演説者は、ファシストと同様にあるいはそれ以上に画一的である——内容において、調子において、語彙やレトリックの用法において。主人公ボウリングは、人間的品位のための闘争を呼びかけるこの反ファシストの演説の逆説にうんざりする。政治的人間とはいつもこうだ。主人公の言葉を通してオーウェルは、ある体制や運動の侍女になりさがった観念の形態(イデオロギー)がいかに生気を欠き、人間的共感を生むことが少ないかをあきらかにする。それは、空虚な言葉の氾濫、人間的品位を失い死語と化したイデオロギーのコトバの羅列であった。スペイン内乱での経験以降オーウェルがファシズムとスターリニズムの対称性を認識したのは、このような無数に繰り返りひろげられる政治集会や共産党系出版物において溢れでる死語の戯れのなかにおいてであった。記号としての政治語彙がリアリティを失って一

人歩きするという痛ましい光景においてであった。記号としてのスローガンが豊かな意味形成的実践（シグニファイイング・プラクティス）という性格を失い、人々は、政治の過剰の状況と過剰な政治の支配する集団・社会に典型的にみられるように、スローガンの単なる担い手あるいは客体となる。それはもうひとつの非主体化、もうひとつの脱主体化である。こうして寒天の冬の夜「ファシズムの脅威」と題する講演をききながら主人公ボウリングは、「1941年」に勃発するといわれている戦争と戦後に出現するであろう世界を想像する。

戦争！ 私はまたそれを考え始めた。それはまもなく確実にやってくるだろう。しかし誰れが戦争を恐れているのか？ いいかえれば、誰れが爆弾や機関砲を恐れているのか？ “君たちだ” というであろう。その通り、私も恐れているが、爆弾などをみた経験のある人なら誰れだって恐れるであろう。だが、問題なのは戦争ではなく戦後のことである。つまり、我々がおち込もうとしている世界のことである。あのような憎しみの世界、スローガンの世界。色シャツ、鉄条網、ゴムの警棒。電燈が昼となく夜となくついている監房、寝ている間も見張っている警察。パレード、巨頭の顔を画いたポスター、百万人の群衆がいっせいに指導者にむかって歓呼の声を上げているうちにつんばになり、本心から彼を崇拜していると思込むが、その皮ふの下では嘔吐するほど彼を憎みつづけている。すべてそのような事態になろうとしている。そうではないだろうか。そのようなことはありえないと思うときもあるが、それは避け難いと思う時もある。とにかくその晩は、そうなるものと思ひこんでいた。時代の空気はすべて、その小男の講師の声の響きのなかにあった。(前掲書)

このよどんだ「時代の空気」にひそむ全体主義の脅威との政治的、文学的な抵抗は、既に述べたように、オーウェルの生涯にわたる作家としての課題であった。

二

オーウェルは、このような権力崇拝を、全体主義諸国ばかりでなく、イギリスをも含めて「我々の時代の精神史の大きな特徴」とみていた。〈探偵小説と現代文化〉という副題をもつすぐれた長編評論「ラフルズとミス・ブランディッシュ」において彼は、現代文化がいかに力の崇拝と権力本能によって支配されてしまっているかを考察している。 (“Raffles and Miss Brandish”, *Horizen*, Oct. 1944; *Politics*, Nov. 1944, in: *The Collected Essays*, vol. III. 引用は小野寺編訳、前掲書による。) 彼は、E・W・ホーナングの『ラフルズ』(1900年)とJ・

H・チェイスの『ミス・ブランディッシュの蘭』（1939年）という二つの犯罪小説の比較をつうじて、20世紀以来のイギリスの道徳的雰囲気の変貌と、その底に潜んでいる「世の中のもの」の考え方や心理の違いを考察し、この二つの作品の道徳観のへだたりのなかに全体主義時代の精神状況の特質を析出している。このすぐれた評論がめざしているのは、いわば二つの異なった精神的風景（モラル・ランドスケープ）の比較であるといつてよい。そして、この比較を通じて私たちは、オーウェルの「人間らしさ」の思想がどのような実質をもっているかを知ることができる。

由緒あるパブリック・スクールの卒業生であり、上流社会のクラブの会員である「素人強盗」ラフルズを主人公とする小説では、殺人や流血などの残虐行為も、性倒錯やサディズムなどの煽情行為も一切でてこない。ラフルズは貴族的な高級住宅地メイフェアの家々を荒すけれども、じつはこういう家へ客として招かれたりもする。しかし客として招かれた家の厚意を裏切ったりはしない。盗むのは相客からであり、その家の主人ではない。武器は使わず、暴力を避け、友情を神聖と考え、女性に対しても騎士的に振舞う。そして同時代のアルセーヌ・ルパン同様、愛国心に富んでいる。だが、なによりも重要なのは、彼がクリケットのイングランド代表であったことである。お金と時間のかかるクリケットは圧倒的に上流階級のスポーツであり、勝つことよりも「型式」が重んじられる。イギリス人の心の中では、クリケットは、公正な勝負とか礼儀正しさとかいった考え方と結びついている。強盗にしてクリケット選手であるラフルズ——作者にとってそれは、紳士強盗の絶好の変装の道具立てであるばかりでなく、道徳的に最も対照的なものを結びつける手だてでもあった。ラフルズには、いわば本能的に守っている行動の規範がある。彼は、あるいくつかの「してはいけないこと」を頑くなに守りつづける。その意味では、ラフルズものは、たとえばかばかしいものではあっても、「とにかく世の中に規準というものがあつた時代の作品」なのである。オーウェルは、この作品を包む道徳的雰囲気の中に、なお品位や公正さや礼儀正しさというような道徳的規準が存在した時代を嗅ぎ当てている。

これに対して、『ミス・ブランディッシュの蘭』は、殺人、殺傷、死体発掘、残酷きわまる拷問、性的サディズムやマゾヒズム、強姦など、ありとあらゆるおぞましい行為や場面によって粗筋が構成されている。この作品では、徹底した墮落と利己主義こそ当然人間の行為の規範なのだと考えられている。大小のギャングも、これを追う私立探偵や警察も同じように悪（わる）で、その行為の動機も似たりよったりである。そこには、「愛情、友情、善意といったものどころか、ごく平凡な思いやりさえみじんも見られない。そればかりか、正常な性感覚さえほとんど存在しないのである。結局、全編を通じて見られる動機はただ一つ、力の

追求だけなのである。」

オーウェルは、この作品が最高の人気を博したのが1940年、つまり本土防衛戦と電撃爆撃の時期であったことに注目し、その意味を考察している。その手掛りとして、彼は、開戦間もない頃の『ニューヨーカー』誌にのった一枚の漫画を参考にしてている。それは、「北フランスの大戦車戦」「北海の大海戦」といった見出しだけの新聞がづらり並んだ売店に近づいて一人の小男が『死闘実話 (アクション・ストーリーズ)』をくれ」と言っている漫画である。オーウェルは、この小男のなかに、戦争、革命、飢饉、疲労といったものより、ギャングとか懸賞のかかったボクシングの世界のほうがよほど「現実的」で「すげえ」と思っているげんなりしきった何百万という人間の代表をみている。アクションものの読者からすれば、ヨーロッパの地下抵抗運動の話やロンドン電撃空襲などは「めめしいもの」でしかない。それにひきかえ、せいぜい数人の死者しかでないシカゴの暗黒街の銃撃戦の方が本当に「すげえ」と感じる。オーウェルは、この悲しい逆説を生みだす現代人の心理について、次のように洞察している——

今では、こういう心理がおどろくほど普及している。兵士は頭上1、2フィートのところを機関銃の弾丸がびゅんびゅん飛んでいく下で、ぬかるみと化した塹壕に腹ばいになりながら、耐え難い退屈しのぎにアメリカのギャングものを読む。(中略)空想の世界の弾丸のほうが現実の弾丸よりスリルがあるのは、当然のことだと思われているのである。これはあきらかに、冒険物語の世界では誰れもが事件の主人公になった気になれるのに、現実の世界では、まず受身の犠牲者でしかないからである。(前掲書)

オーウェルは、『蘭』という作品も退屈な現実からの逃避、しかも残酷と性的倒錯の世界への逃避とみる。『蘭』は権力本能に狙いをさだめ、徹底した弱肉強食を主題としている。その底には、犯罪がふとどきなものは引き合わないからだという思想が流れている。警察に味方してギャングを敵にまわすのは、警察のほうが強力だから、いや法のほうが犯罪よりも商売として儲かるからにすぎない。オーウェルは、高度の科学・技術文明における現代人の退屈な現実生活からの逃避とむきだしの力の崇拜のなかに、道徳観におけるアメリカの影響とそれに伴う思想の卑俗化の現象を見ている。彼は、この作品が、会話ばかりか地の文までアメリカ英語で書かれているという事実に注目し、言葉のアメリカ化と道徳観のアメリカ化という現象を指摘するのである。「アメリカでは、現実の生活でも小説の世界でも犯罪に寛容であるどころか、最後に成功しさえすればあえて犯罪者を賛美するという風潮まで見られる。犯罪

があればさかんなのは、結局こういう態度が原因なのである。」剥き出しの力の崇拜、成功礼讃、サディズム、マゾヒズム——オーウェルは、『蘭』の「現実主義」(リアリズム)の精神世界のなかに、現代の「文明の徴候」を読みとる。つまり、政治や経済と全くかかわりのない犯罪小説のなかに、「いかにも全体主義の時代にふさわしい白日夢」をみるのである。この「白日夢」こそ、多くの知識人を含めて現代人のなかに、拷問と粛清の恐怖(テロル)支配をもともしない権力渴望と、権力に対する奴隸的崇拜の態度とをはぐくんだものと、根っここのところにつながっているものだ。その意味では——

空想的なギャングの世界で、チェイス(作者)はいわば現代の政治の世界の精髓を描きだしたのだ。そこでは爆撃による市民の大量殺戮、人質の利用、白状させるための拷問、秘密牢、裁判抜き死刑、ゴム棒による殴打、糞溜めに沈めて殺すような行為、記録統計資料の体系的な改ざん、裏切り、買収、売国行為、こういうことが正常であり道徳的善悪とかかわりがないとされる。いやそれどころか、大がかりにかつ大胆にやれば称賛さえされるのだ。普通の人は政治に直接関心を持ってはいないから、政治のことを読むとすれば、現在の世界の抗争にしても、それを個人をめぐる単純な物語に置き換えたものでないと興味をもてない。GPU(ゲーパーウー)やゲシュタポには興味が湧かなくても、スリムやフェナー(『蘭』のなかのギャングと私立探偵)の話ならおもしろく読めるのだ。庶民は自分に理解できる形の権力を崇拜する。12歳の少年はボクシングのチャンピオン、ジャック・デンプシーを崇拜し、グラスゴースラムの青年はアル・カポネを、実業専門学校の野心的な学生は自動車王ナッフィールド卿を、『ニュー・ステイツマン』の購読者はスターリンを崇拜するのだ。知的成熟度に差はあっても、道徳観に差はないのである。(前掲書)

こうしてオーウェルは、2つの犯罪小説を色どる道徳的雰囲気へのあたりを考察することによって、「フロイトとマキャヴェリがすでに外堀まで埋めてしまった」現代の精神状況を解説しようとした。そのさい、比較の最も重要な類型的視点は、依然として人間的品位と権力崇拜なのである。もちろんラフルズは、本物の道徳律をまったく持ちあわせていないし、社会的良心もない。せいぜい、「紳士の神経系統」とでもいうべき「一連の反射作用」だけである。それでも『蘭』のような残虐行為や悪そのものを愛する退廃ぶりと比べると、偽善的な上流気どり(スノビッシュネス)でさえ「行動の歯止めになるもの」として過少評価されてはならないのである。オーウェルの明晰な散文は、人間的品位の感情とそれへの共感能力によって、現代の権力崇拜(パワー・ウォーシップ)を撃つのである。

オーウェルは、大衆文学の道徳的批評をつうじて、人間的品位と道徳的規準(モラル・コード)の破壊が進行していることを分析した。現代文化の裡にひそむ現実からの倒錯的な逃避と権力本能の発散のなかに、彼は、いかにも全体主義時代にふさわしい白日夢をかかみたま。それは言葉と文化におけるアメリカニズムの影響の結果であった。以前には、古き良き時代の怪盗ラフズのように、守るべき価値と道徳的態度が存在した。オーウェルは、いくつかのイギリスの大衆文化をふちどる道徳的風景(モラル・ランドスケープ)の社会学的分析において、なお存在する精神の健康を確認した。たとえば、コミックな絵葉書を論じた「ドナルド・マッギルの芸術」において彼は、半意識的な信念(ミス)のようなものとなっているイギリス労働者階級の道徳的態度を論じている。労働者たちはセックスについてひどく猥雑な言葉を投げかけ合うが、それでも彼らは正常な性関係、すなわち結婚し子供が生まれるというような自然な生殖行為としての性行為だけを肯定している。オーウェルはマッギルの絵葉書の「芸術」の中に、猥雑な労働者たちの人間の生命に対するぬくもりの感情を見出すのである。また「少年週間誌」というエッセイにおいて、「イギリスの少年雑誌の道徳律(モラル・コード)はしっかりした(ディーセント)ものである。犯罪や不正直は決して賞賛されることはない。アメリカのギャング物語のようなシニシズムや腐敗はない」という。("Boy's Weeklies", *Horizen*, March 1940, in: *The Collected Essays*, vol. I)しかし今や、新世界から流入してくる暴力やサディズムなどの残虐嗜好(atrocity-mongering)のいわゆる「アメリカ雑誌(ヤング・マッグ)」によって、イギリスの大衆文化の世界の道徳的健康も冒されつつある。オーウェルは、アメリカの下位文化(サブ・カルチャー)を色彩むき出しの力の崇拜や成功礼讃を現代の文明の徴候とみ、そのイギリスの大衆文化への影響に顔をしかめた。しかし、さらに重要なのは、自由主義国アメリカの大衆文化における反ファシズムが「ファシズム時代の白日夢」の様相をおびていることに注目したことであった。

ヒトラーに対する憎しみがアメリカの感情の大半を覆った時、アメリカ雑誌の編集者たちによっていかにすばやく「反ファシズム」がわいせつ文学製造のために取り入れられたかをみると、非常におもしろい。いま私の手元にある雑誌には、「アメリカに地獄が到来した時」という詳細な長編の物語が載っている。それは、「血に飢えたヨーロッパの独裁者」の手先どもが、殺人光線や透明飛行機を使ってアメリカ合衆国を征服しようとしている話である。ナチス党員が婦人の背中に爆弾をくくりつけ、高い所から突き落して空中でバラバラに吹きとばされるのを眺めたり、裸の少女たちを髪の毛で互いに結びつけ、ナイフで脅して踊らせたりする光景など、まったくあけっぴろげにサディズムに訴えている。編集者

はこれら全てのことについて厳粛な説明を加え、移民制限を強化する口実に使っている。

(中略)『船長』に現在連載中の小説の主人公は、常にゴムの棍棒を振り回している。これはよくない前兆だ。(“Boys Weeklies”, *ibid.*)

赤裸々な力(暴力)崇拝や成功礼讃を色調とするアメリカのサブ・カルチャー(「アメリカ雑誌(ヤング・マガジ)」)が、反ファシズムを大衆のわいせつな性的嗜好やサディズムを満足させるための材料として用いるという精神風景の中に、オーウェルは、現代文明の悪しき徴候を読みとる。なぜなら、退屈な生活の裡にひそむこのような心理的危機こそ、民族的優越や人種カースト、指導者崇拝などに支えられるファシズムと密通するものだからである。彼は、現代の生活を色どる快楽主義(ヘドニズム)と快楽主義が生み出す非合理的衝動を合理的に理解しようと努めた数少ない知識人の一人であった。オーウェルの認識によれば、この快楽主義は、H・G・ウェルズのユートピアが示すように如何に合理的な科学・技術に支えられていようとも、暴力や肉体力に対する嗜好、原初的なものへの熱狂などの行動をたちきることはいできない。科学者による合理的な社会、計画的な世界国家というウェルズ的な快楽主義的世界観は、たしかに人生の闘争的、動物的な面を嫌悪するが、しかしその内的衝動を克服することはできない。ウェルズがナチズムを軽視し、その邪悪な本性を理解できなかったのは、そのためである。オーウェルによれば、ファシズムの精神世界を認識するにあたって重要なのは、「現実に世界を形成しているエネルギーは、自由主義的知識人たちが機械的に時代遅れであるとして放棄し、しかも、あらゆる行動力を失ってしまったかのように徹底的に彼らのうちから排除してきた感情——つまり、民族的誇り、指導者崇拝熱、宗教的信念、征服欲などから発している」ということであった。(G. Orwell, “Wells, Hitler and World State”, *Horizon*, August 1941, in: *C.E.*, vol. II. Also see. “Prophecy of Fascism” *Tribune*, 12 July 1940, in: *C.E.*, vol. II.)このようなオーウェルの認識を支えていたものは、『ウィガン波止場への道』(1937年)で既に表明していた機械文明(進歩)と快楽主義に対する懐疑であり、イギリスの民衆の健全な道徳観に対する信頼である。友人の作家ジュリアン・シモンズの証言によれば、オーウェルは、彼の機械化に対する不信を攻撃した人々に対して次のように返答した——「木や魚や蝶などに対する子供の頃の愛情を保持することによって、平和で品位のある未来をいくらかでも可能にすることができる。逆に鋼鉄とコンクリート以外に何も崇拝してはならぬと説くことは、人間が憎悪と指導者崇拝以外に余分のエネルギーの排け口をもたないような状態を、少しずつ確実にするだけであろう。」(Julian Symons, “An Appreciation” in: *Nineteen Eighty - Four*, Heron Books, London 1970.) こうしてオ

ーウェルは、現代文明の快樂主義的生活の裡に蓄積されていく暴力崇拜と憎悪の讃歌こそ、「ファシズムの時代の白日夢」の中味なのだと言う。それはすぐれた文明論であるだけでなく、人間の邪悪な本性に対する洞察である。彼は、ヒトラー『わが闘争』を書評した重要な文章において、なぜ「哀れみをさそう犬のような顔」をしたこのデマゴークが、「十字架上のキリストの表情の再現」のように思われたのか、なぜこの不平不満をもった人生の被害者が「いかんともし難い運命にいとむ自己犠牲的な英雄」として受け入れられたのかを問うて、次のように述べている。

彼はまた生に対する快樂主義的な態度の欺瞞をはっきりとつかんでいた。西欧では、さきの大戦以後、ほとんど全ての思想、とくに「進歩的」思想は全て、人間というものは安楽、安全、苦痛の回避以上のことは何も望まないと暗黙のうちに想定してきた。このような人生観には、例えば、愛国心とか軍事的美徳などは存在する余地はない。自分の子供たちが玩具の兵隊で遊んでいるのを見ると、社会主義者はびっくりするのが普通であるが、彼には錫の兵隊に代るものを見つけてやるができない。錫の平和主義者では代りにならないのである。ヒトラーは、楽しみを知らない彼の心の中で、このことを異常なまでに強く感じとっていたので、人間は安楽、安全、労働時間の短縮、健康法、産児制限、つまり一般的に言えば、常識的なものだけを望んでいるわけではないということを知っている。人間はまた、少くとも時々、太鼓、旗、観兵式はいうまでもなく、ほんとうの闘争や自己犠牲を欲するというのを、知っているのだ。経済理論としてはどうであれ、ファシズムやナチズムはいかなる快樂主義的な人生観よりも、心理学的にははるかに強固なものである。同じことは、たぶん、スターリンの軍国主義的な社会主義にもいえるであろう。偉大な独裁者の三人が三人とも、自分の人民にたえがたい重荷を押しつけることによって自分の権力を強化してきたのである。社会主義、いや資本主義でさえ、もっとけちけちしながらであるが、人々に「私は諸君によい暮らしを提供しよう」といったのに比べて、ヒトラーは「私は諸君に闘争、危険、死を提供する」といったのであり、その結果、国民全体が彼の足下に身を投げだしたのである。おそらく、しばらくすれば彼らはそれにもあき、前大戦の終りの時のようにその考えを変えるであろう。殺戮と飢餓のあとの数年は、「最大多数の最大幸福」が結構なスローガンとなるであろう。しかし現在は、「終りなき恐怖よりも恐怖をもって終るほうがまだ」という気分が勝利を占めている。我々はいま、こうしたスローガンを作り出した人間と戦争しているのだから、このようなスローガンが感情に訴える力を過少評価してはならない。（“G.Orwell.” Review of *Mein Kampf* by Adolf Hitler,

オーウェルは、このような非合理的な内的衝動を不断に蓄積する現代文明の快樂主義的(ヘドニスティック)生活に対して、自然と伝統のなかで培われたイギリス民衆の健全な道德観と中央集権的独裁制とは異なる社会主義——ゆるやかな平等と権力に対する民衆のコントロールとを結合した社会主義——に依って批判した。とりわけ、「観念の世界に住んで現実にほとんど触れたことのない」左翼知識人が軽視してきた民衆の「愛国心」(パトリオティズム)と社会主義との架橋を思想的戦略とした。そのさい、オーウェルの定義する愛国心は、「保守主義」とは全く関係がない。むしろ、「保守主義とは反対のものである。なぜなら、それは、常に変化しながら、しかしなんとなく同じものと感じられている何かに対する献身なのだから。それは、過去と未来とをつなぐひとつの橋である。」「労働者階級においても愛国心は深いが、それは無意識的なものである。」(G. Orwell, *The Lion and the Unicorn; Socialism and the English Genius*, Secker and Warburg, 1962.) 比喩的にいえば、オーウェルは、このような民衆の愛国心は平等を旨とする社会主義のなかにその精神を、未来を嚮導する社会主義は民衆の無意識のうちにやどる愛国心のなかにその肉体を見出すべきだ、というのである。デモクラシーとファシズムとの戦争という特殊な事態が、この愛国心と社会主義の結合を可能にするかもしれないし、また、この結合がなければ戦争にかてないであろう、とうのが彼の立場だった。「愛国心と知性はもう一度結びつかなければならない。我われは戦争をしている。それも、きわめて特殊な戦争をしているという事実が、その結合を可能にするかもしれない。」「戦争と革命とは不可分である。我われはヒトラーを打倒しない限り、ヨーロッパ諸国で社会主義として通用するものを樹立することはできない。逆にまた、経済的、社会的に19世紀を脱し得ないうちは、ヒトラーを打倒することはできない。」(Ibid.) 戦争と革命の不可分性をいうとき、既に一時期の潜在的平和主義(反戦主義)の立場を脱していたオーウェルの心の中では、スペイン戦争における経験が去来していたかもしれない。バルセロナやアラゴン前線では、民衆は、「社会主義の小宇宙」における「平等の空気」のなかで「人間らしさ」(ティースンスイ)の感情を再生させた。オーウェルは、スペインでの経験によってえた「人間の人間らしさへの信念」を生涯忘れなかった。(『カタロニア讃歌』その他)民衆のこの人間的品位に対する共感の意志が、社会主義と戦争を断固として戦う愛国心との結合を支える思想的原型であった。オーウェルによれば、イギリス民衆の愛国心と結合さるべき社会主義は、おおよそ次のような理論的輪郭をもったものであった——

社会主義は通常「生産手段の共有」というふうに定義される。おおざっぱに言えば、国家が国民全体の代表としてすべてのものを所有し、すべての国民が国家の雇人になるのである。といっても、それは、人々が衣類とか家具とかいった私有品まで取り上げられるということではなく、土地、鉱山、船舶、機械といった生産財がすべて国家の財産になるということである。つまり、国家が唯一の大規模な生産業者になるのである。社会主義があらゆる点で資本主義よりすぐれているとは断言できないが、しかし、資本主義とはちがって、生産と消費にかかわる諸問題を解決できることだけは確かである。(中略)

しかしながら、「生産手段の共有」というだけでは社会主義の十分な定義とならないことが、この数年間であきらかになった。次のような要件もつけ加えなければならない——所得の近似的平等(近似的以上である必要はない)、政治的民主主義、一切の世襲の特権とくに教育上の特権の廃止。これらは階級制度の復活を防ぐのに必要な保障条項に他ならない。大多数の国民がほぼ同じ水準の生活をし、政府に対してなんらかの規制力をもつものではない限り、国有いうことはほとんど意味をなさない。さもないと、「国家」は自選の政党に過ぎないものとなり、財力よりは権力に依拠した少数独裁や特権が復活しかねない。(Ibid.)

オーウェルは、いささか猥せつさと人生に対する深い道徳的態度とが混淆したイギリスの民衆文化を深く愛し、それに土着した知識人(社会主義者)であった。

三

人間的品位もしくは人間らしさの感情は、それ自体としては政治的・社会的プログラムにはなりえない。しかし、そのプログラムを支える思想的根拠とはなりうる。さらにまた、権力渴望者の言語に抵抗する思想的根拠にもなりうる。その意味では、『1984年』は、人間らしさの感情が破壊されてしまった社会の物語として読むことができる。怖いのは、この社会が抑圧された者の先頭に立つと主張した人々によって確立されたことである。彼らは、権力に武装された知性をもって、庶民の感情とこの感情のうちに息づく自由とを抑圧し、操作し管理しようとする。権力の言語は、他者との共生感情に基づく人間らしさの観念を体系的に破壊し、これまでの世界に例のないほどのひどい抑圧を生みだした。そして、抑圧された情念を憎悪の自己増殖のメカニズムへと流しこみ、そのことによってすべての忠誠を国家へ、国家の指導者へとふり向けようとするのである。

ヒステリーと操作された憎悪と紋切り型の政治スローガンの溢れる「管理された異常精神」

のなかであって、ふと読者に安心と落ち着きを与える数少ない場面は、主人公ウィンストンが恋人ジューリアに人間らしい欲求と感情を表出することができたあとのある静かな満足のときであり、また普通の人々（コモン・ピープル）の生活のなかに息づいている正気（セイン）の感覚を共有するときであった。そのとき、何気ない仕草も家具などの事物も、たくましい腰と腕の洗濯女が歌う他愛のない唄も、木々の梢のざわめきや鳥のさえずりや陽の光も、限りない郷愁をさそって人間らしさの感情を湧きあがらせ、まともさの感覚を再生させる。これらの安らぎの経験は、既にウィンストンのみた奇妙な夢のなかではじめて形を与えられたものであり、過去を抹殺・改造された全体主義体制においては所詮は「夢想」でしかないのだが、それにもかかわらず、否、それ故にこそ、哀しいまでに生への欲求と人間らしさへの渴望をかきたてる。

ウィンストンは、ある日「真理者（ミニトルー）」の廊下で、ジューリアが巧みなカモフラージュによってテレスクリーンの監視を避けて渡した紙片のなかに、「あなたを愛しています」という文字を見つけたとたん、生きていたいという欲求がこみあげてくるのを経験した—

かれは、夢のなかで見たときのように、女の糸もまとわれない、若々しい肉体を思い浮べてみた。かれは、あの女が他の女たちと同じように愚かで、嘘と憎しみにこり固まっており、肉体も氷詰めだと想像したのであった。あの女を失うかもしれぬ、あの白くて若々しい肉体を取り逃してしまうかも知れぬと思ったとたん、なにか熱病に取り憑かれたような気分になった。(G. Orwell, *Nineteen Eighty-Four*, With a Critical Introduction and Annotations by Bernard Crick, Clarendon Press, Oxford, 1984. 新庄哲夫訳『1984年』, 早川書房。)

だが、ジューリアとの最初の肉体交渉は、ほんのわずかしか性欲を感じない「意志による行為」であった。しかし、それでも感覚の甦えるのを経験した。かの女の髪の毛の漂わせる臭い、口のなかに触れたときの味わい、肌の感触は、かれの「体内か身のまわりにある空気に浸み透っていくかのように」思われた。いまやウィンストンにとって、かの女は肉体的に必要なもの、欲しいものとなった。この感覚の覚醒は、同時にまた、生き生きとした感情の再生でもあった。「権利」としてのかの女の肉体への欲求は、情欲よりも愛情を誘い、これまで一度も覚えたことのないような深い思いやりを育くんだ。

こうしてウィンストンは、「会うたびごとににも肉体交渉をもたなければならないと考え

ずに、二人きりになれるような場所が欲しい」と考えるようになった。かれはある日、かつてセント・パンクラス駅だった場所の北東部にある茶褐色のスラム街（プロレ地区）の、ある古道具屋の二階に二人だけの部屋を借りた。そこは、しばらく前に秘かに日記帳を買い求めた所であった。日記をつけるということは、国家の意志への完全な服従とあらゆる問題に対して完全な意見の一致を強制するこの全体主義体制においては、それ自体「思想犯罪」（ソート・クライム）であり、一日24時間の絶えまない監視によって私的な個人生活が圧殺されている状況においては、身震いするような恐怖を伴う危険な行為であった。しかしかれは、私的な日記を記すという記録的理性の行為によって、なお「未来と意思を通い合わせ」ようとしたのであった。だが、私的な時間ばかりでなく、私的な空間を持つとして部屋を借りることは、もっと危険な行為であった。全面的な監視体制にあっては、それは、「野放図な自殺行為」に等しかった。新語法（ニュー・スピーク）でいう「利己生活」（OWN・ライフ）は、個人主義と逸脱行為を意味し、独自の私的な時間と空間それ自体、党と党付属の諸機関に対する重大な反逆行為とみなされていた。孤独を楽しむようなことはすべて、たとえば、独りで散歩にでかけることさえ常に多少の危険を伴っていた。ウィンストンは、戦慄すべき恐怖によって身も凍るような思いをしながら、結局二人のために部屋を借りた。この自殺行為をあえて犯させたものは、かれの心の奥底にあってなお根絶され尽していない「まともさ」（ティーンズイ）の感覚への希求であったろう。また、肉体的欲求の覚醒をつうじて得た「普通の生活」と、そのなかに夢みた「人間らしさ」（ティーンズイ）への渴望であったろう。たとえば、その部屋は次のような雰囲気をもっていた――

部屋のたたずまいは一種のノスタルジア、いわば祖先を懐しむといったような感情をかきたてたのであった。このような部屋に住み、炉火の側で肘掛け椅子に身を埋めながら、炉格子の前の長台に両足を投げ出し、壁炉の棚にのった鉄瓶の音に聞き入るのがどんな気分だったか、彼にはよくわかっているような気がした。それこそ一人きりになれ、それこそ安心してきっていられるのだ、監視の目も届かないし、自分を追いかける声も聞こえてこない、鉄瓶の鳴る音と置時計が時を刻む音だけである。（Ibid.）

オーウェルは、二重思考（ダブルシンク）によるいわば「体制化された分裂病」の社会において、あたかも曇りとした鉛色の空から一瞬のあいだ青空と明るい陽ざしが射してくるかのよう、危険と背中合わせのつかの間の静かな生活空間を描写している。それは、政治とイデオロギーによって解釈変えされる以前のありふれた普通の生活であったが、それさえも、

全般的な監視と処罰の体制においては、美しくも哀しい散文詩の色調をおびてくる。ある日、ジュリアアとの行為のあと、ウィンストンは、あたかもそれがかれの記憶の底に固着しているかのように、遙かなる過去について夢想する――

沈みゆく太陽の黄色い日差しがベッドの足もとにおち、暖炉を明るく照らし出していた。炉格子の内側では鍋の水が沸騰していた。庭では女の歌声はやんでいたが、子供たちの遠い叫び声が往来から漂うように伝わってきた。かれはぼんやりと、抹殺された過去の時代においては、こうしてベッドに横たわっているのが普通の経験ではなかったらうかと思ってみた――ある夏の涼しい夕べに、男と女が身に糸もまとわないうで好きな時に愛を営み、気ままに世間話をし、むりやり起き出そうという気もおこさないで、ただこうして横たわったまま、屋外のいかにも平和そうな物音にじいっと耳を傾ける。それが普通の生活だと思われた時代は、本当に一度もなかったのであろうか。(Ibid.)

この静かな安らぎの時間は長くは許されていないが、それでも健全な生活感覚の再生は、まともさと人間的品位の感情を回復させる。このような自然な感情の再生は、ウィンストンの心の奥底に固着して未だ根絶され尽していないある種の生活と人間性への保守感覚によるものであろう。そしてこれは、究極には少年時代の母の思い出につながっている。ある日、眼に涙を一杯ためて夢から目を覚したとき、なお胸の底に鮮かに残っていた母のイメージを回想する――

母のことを思い出させる範囲からしても、かの女が非凡な女性だったとは思えなかったし、まして知的な女などとは思ってもよらなかったが、それでもかの女は一種の気品と一種の純粋さを兼ね備えていた。それは、ただ、母が押しつけではない規範を守ったからに他ならないとかれは思った。母の感情は生得のものであり、外部の力によって変えることはできないのであった。無駄な行動というのは意味がないからといった考えは夢にも思いつかなかったに違いない。もし誰れかを愛するとすれば、あくまでその人を愛さなければならぬ、何も与えるものがない時は、その人にまだ愛を与えることができるのだ。(Ibid.)

ウィンストンにとって、日記という記録的理性の実践が、全体主義権力による監視と処罰、それに監視される者の相互監視と相互密告のシステムにおける歴史の捏造と組織的虚偽に対する抵抗の方法であったように、記憶は、新語法(ニュー・スピーク)と二重思考(ダブルシンク)

とによる「体制的分裂病」からかろうじて自己のアイデンティティを護る手段であった。その意味では、どんよりとした鉛色の背景のなかで進行するこの恐怖の物語が、体制的な歴史の書き換えに抗して私的記憶を守るために日記を書くという主人公の決意から始まるのは、作者オーウェルの道徳的テーマを暗示し、守るべき価値や信念への意志を示している。既に述べたように、オーウェルは、善良で人間らしい生活様式は伝統のなかに、そして庶民(コモン・ピープル)の暮しぶりの流儀をふちどる他者との共生感情のなかに存在すると考えていた。これは、貧困と階級的抑圧が民衆を完全に非人間的にしてしまったとは考えない。むしろ、このような貧困と抑圧こそ民衆(コモン・ピープル)の生活と態度のなかに純粋な同胞精神と友愛とを生みだしたのだ、競争的個人主義にあえぐ中産階級の方こそこれらの人間らしい徳を喪失してしまったのだ、と認識していた。これは、『ウィガン波止場への道』(*The Road to Wigan Pier*, London: Gollanz, 1937.)と『カタロニア讃歌』(*Homage to Catalonia*, London: Secker & Warburg, 1938.)、それに『空気を求めて』(*Coming Up for Air*, London: Gollanz, 1939.)におけるオーウェルの道徳的、社会的パースペクティブでもあった。

極限的な監視社会のなかでなおも「自由」への脱出に身を賭けようとする主人公も、「プロレ階級」の重要生を認識し、彼らのなかに希望を見い出そうとした。ウィンストンの次のような、自然と伝統につながる民衆の発見は、「この作品における決定的に重要な文章」(Bernard Crick, Introduction to *Nineteen Eighty-Four*, Clarendon Press, Oxford, 1984.)である。

彼らは、いささかも疑問をもたないでめいめいが信ずるものに従っていた。大切なのは個人的な人間関係であった。そして、まったく無力な仕草や抱擁、涙、死にかけている人に語りかける言葉なども、そのものとして価値をもちうると考えられたのだ。突然、彼の心に、プロレ階級こそずっとこのような状態にあったのだということが思い浮かんだ。彼らは、党や国家、あるいは観念に忠実ではないのだ、ただお互い同士に忠実なのであった。生れて初めて彼は、プロレを軽蔑したり、彼らを、いつの日かめざめてこの世を建て直す時がくるかもしれないというような単なる無気力な力として考えたりすることを止めた。プロレこそは、ずっと人間的であり続けてきたのである。彼らは、心のなかまでかさかさになったわけではないのだ。彼らは、自分の方こそ意識的な努力によって再び学びとらなければならない素朴な感情を持ち続けてきたのである。

They were governed by private loyalties which they did not question. What mattered

were individual relationships, and a completely helpless gesture, an embrace, a tear, a word spoken to a dying man, could have value in itself. The proles, it suddenly occurred to him, had remained in this condition. They were not loyal to a party or a country or an idea, they were loyal to one another. For the first time in his life he did not despise the proles or think of them merely as an inert force which would one day spring to life and regenerate the world. The proles had stayed human. They had not become hardened inside. They had held on to the primitive emotions which he himself had to re-learn by conscious effort. (Ibid.)

ウィンストンは痛切、哀切に想う——家族が助け合うのにその理由を知る必要もないと感じていたような時代があった筈だ、と。独特の風景をもつ母の夢は、彼の心を責めさいなんだ。幼い自分を助けるために死んでいった母の追憶は、30年の歳月を経てもなお、限りなく悲劇的で切ないものであった。そして、突然、ウィンストンは、このような悲劇は現在では最早考えられなくなってしまったという事実に関心を打たれる。悲劇は「古い時代の所産」であった。愛や友情、誠実、信頼などの観念がなお意味をもっていた時代の話であった。恐怖と憎悪と密告の体制では、感情の尊厳も「深い複雑な悲しみ」もない。このような、究極的には母の追憶につながる過去の記憶（メモリー）と相互信頼（トラスト）、そして民衆（プロレ）の発見は、また、物語の筋立てにおいては、周期的な恐怖と狂気のシンフォニーをかなでる党の公式イデオロギーに対する平明な言葉の擁護と対応している。それは、集団的熱狂をかきたてる憎悪のプロパガンダに抗する民衆理性である。またそれは、平明で明晰に書くという作者オーウェルの散文の精神の戦闘性でもある。

定期的な憎悪週間（ヘイト・ウィーク）と毎日の二分間憎悪、双方向のテレスクリーンによる監視、正常な性の禁止、抑圧されたりビドゥの政治的外在化と指導者（ピック・ブラザー）への一元的投射、事実の捏造と過去の改変による客観的な事実の否定、聖なる序列（イエラルシー）をなす指導者装置の確立、数十種類に及ぶ拷問のテクノロジーと公開処刑、このようなオセアニア国のありとあらゆる支配と管理の方法のなかで、しかし、最も有効なのは精神そのものの管理（「魂の改造」）であり、そのための言語体系の創出である。自由を希求する者を異端として処刑するよりも、自由そのものを願わないような人間を作り出すこと、否、自由という観念（言葉）そのものを消滅させることの方が重要であらう。作者オーウェルにとって、これは、同時代の経験にもとづく恐怖であった。スペイン戦争における「悪夢の経験」とスターリン主義の認識とをふまえて、彼は、現代の全体主義的独裁制は人類史上全く新しい何かではな

いかという予感におののいた。あらゆる抵抗を抑圧するだけでなく、また被支配者の独立と自由の最小限の砦さえ破壊するだけでなく、たび重なる粛清裁判で頂点に達した「人民の敵」と「腐ったリベラリズム」殲滅の大合唱とスターリン崇拜の集団的狂気のなかで自ら精神的自由を放棄する人々を生み出しているのではないか、と思えたからであった。「現代の独裁政治にまつわる恐ろしさは、それが過去にまったく前例がないものであるということだ。現代独裁政治のいきつくところは予知できない。過去においては、全ての専制政治は遅かれ早かれ転覆されるか、あるいは少くとも抵抗を受けるものであった。〈人間の本性〉とは、当然自由を望むものだからである。だが、我われは〈人間の本性〉が不変のものだと絶対には確信できない。自由を要求しないような人間たちを作り出すことも、角のない牛を作り出すのと同様に可能かも知れないのである。宗教裁判は失敗したが、宗教裁判には現代国家の手段がなかった。ラジオ、新聞の検閲、規格化された教育、秘密警察が事態を一変させてしまった。大衆暗示はここ20年間の科学となっているが、それがどの程度成功を取めるか我われはまだ分かっていない。」(G. Orwell, "The Russian Regime", *New English Weekly*, 12 January, 1939, in: *C.E.* Vol. I.) オーウェルは、正統思想の一元的な支配に対するこのような恐怖の経験をふまえて、政治(権力)と言語の関係を文学の危機あるいは文学の不可能の観点から考察した。("Literature and Totalitarianism", *The Listener*, 19 June 1941, in: *C.E.* Vol. II; "Why I Write", *Gungrel*, No.4, 1946, in: *C.E.* Vol. I; "Politics and the English Language", *Horizon*, April 1946, in: *C.E.* Vol. IV; "Politics vs. Literature: an Examination of *Gulliver's Travels*", *Polemic*, No.5, Sept-Oct. 1946, in: *C.E.* Vol. IV; "Writers and Leviathan", *Politics and Letters*, Summer 1948 and *New Leader*, 19 June 1948, in: *C.E.* Vol. IV.)

ここ『1984年』では、オセアニア国の正統思想(公式イデオロギー)である「イングソック(Ingsoc)」体系の完成に必要な公用語(「新語法(Newspeak)」)に対する諷刺として考察している。付録「ニュースピークの諸原理」によれば、この公用語の目的は、「イングソックの熱狂的帰依者にふさわしい世界観や精神的慣習に対して一定の表現手段を与えるだけでなく、それ以外のあらゆる思考方法を不可能にすること」である。また、ニュースピークが最終的に完成されたときには、イングソックの諸原則から逸脱する異端の思想は、「それが少なくとも言葉に依存する限り、言語活動として成立させないということ」である。例えば、自由(フリー)という単語は、「この犬はシラミから自由である」とか「この畑は雑草から自由である」という使用法だけが残され、「政治的自由」や「知的自由」という概念は破壊され尽くしてしまう。こうして、ニュースピークは、明白な異端の言語を抹殺し、語彙を極端に削

減することによって思考の範囲を縮小するのである。例えば、新語法の“Oldthinkersunbellyfeelingsoc”という典型的な文章は——新語法のA、B、C各語彙群とその文法規則をマスターしないと理解できないのであるが——、旧語法(オールドスピーク)に翻訳すると“Those whose ideas were formed before the Revolution cannot have a full emotional understanding of the principles of English Socialism”(「革命前に思想を植え付けられた者はイギリス社会主義の諸原則について十分な感情的理解をもつことができない)」というような文章になる。オーウェルは、このようなオセアニア国の正統言語に対する諷刺を通じて、ナチズムとスターリン主義という20世紀の全体主義支配の恐怖を批判しようとした。事実かれは、B語彙群の説明のなかで、「ナチ(Nazi)」や「ゲシュタポ(Gestapo)」、「コミンテルン(Comintern)」、「インプレコル(Inprecorr)」、「アジプロ(Agitprop)」などの政治用語の語句の短縮が全体主義国家や全体主義的な団体において顕著であったことを指摘している。すでに第1節で述べたように、彼がとくに怒りを覚えたことは、知識人がその唯一の精神的武器である言葉を裏切り、全体主義権力の意向に隷属したことであった。物語の本文でも、真理省(ミントルー)の調査局に勤める言語学者サイムの口を通して、このような言葉と認識に対する知識人の裏切りを諷刺している。「言語破壊の美しさ」に酔いしれるこの言語学者に対する諷刺は、ある種の倫理的前提をふくんでいる——

「新語法の全般的な目的は思想の範囲を縮小することだということが分らないのかね？ 終局的には、我々は、思想犯罪も文字通り不可能にしてしまうだろう、思想を表現する言葉が存在しなくなるのだからね。必要なあらゆる概念はたった一語で表現され、その意味も厳密に限定され、その副次式な意味はすべて抹消され忘れられるだろう。すでに第11版では、その目標からほど遠くないところまできている。しかし、その過程は君や僕が死んだあとも続けられるだろう。毎年毎年、単語は減少し、意識の範囲も絶えず狭められていくわけだ。もちろん、現在だって、思想犯罪を犯す理由も弁解の余地もないさ。それは単に自己規律、真実管理の問題にすぎないからね。しかし、終局的には、その必要さえなくなるだろう。言語が完全なものになったときこそ、革命は完成するだろう。新語法はイングソックとなり、イングソックは新語法となるんだからね。」

「自由の概念が廃棄されたら、『自由は屈従である』というスローガンは必要だろうか。思想の全潮流は一変してしまうだろう。事実、我われがいま理解しているような思想は存在しなくなるだろう。正統とは何も考えないこと——考える必要もなくなることを意味する

のさ。正統とは意識をもたないということになるわけだ。」

“Don't you see that the whole aim of Newspeak is to narrow the range of thought ? In the end we shall make thoughtcrime literally impossible, because there will be no words in which to express it. Every concept that can ever be needed will be expressed by exactly one word, with its meaning rigidly defined and all its subsidiary meanings rubbed out and forgotten. Already, in the Eleventh Edition, we're not far from that point. But the process will still be continuing long after you and I are dead. Every year fewer and fewer words, and the range of consciousness always a little smaller. Even now, of course, there's no reason or excuse for committing thoughtcrime. It's merely a question of self-discipline, reality-control. But in the end there won't be any need even for that. The Revolution will be complete when the language is perfect. Newspeak is Ingsoc and Ingsoc is Newspeak.”

“How could you have a slogan like 'freedom is slavery' when the concept of freedom has been abolished ? The whole climate of thought will be different. In fact there will be no thought, as we understand it now. Orthodoxy means not thinking—not needing to think. Orthodoxy is unconsciousness.”

(G.Orwell, *Nineteen Eighty-Four*, op. cit.)

主人公ウィンストンは、この疲れを知らぬ学者的情熱をもって正統思想を信奉し、「偉大な兄弟（ビッグ・ブラザー）を崇拜し、異端を憎む言語学者が、「血の通った人間ではなくて一種のロボットではないかという奇妙な感情」を抱いた。

このような新語法（ニュースピーク）とイングソックの強制する思想的分裂病に抵抗するウィンストンは、秘密の部屋でのジューリアとの愛の営みのあと、いそがしく洗濯しているプロレの女が歌うざれ唄を窓辺に聞いて、限りない郷愁と人間らしさを感じる。鳥は歌い、プロレも歌う、だが党だけは歌わない。もし希望があるとするなら、そして2プラス2は4になるという秘儀を後世に伝えることができるとしたら、それはこのようなざれ唄を歌うたくましいプロレだと思う。

ただのはかない想いでした

4月の1日のように過ぎ去りました

でもあの眼と声とわき立つ夢は

私の心を盗んでゆきました

時が心の傷口をふさぐと申します

いつだって忘れられると申します

でもあの笑顔と涙は月日が経っても

私の心の糸をふるわせませす

ウィンストンは、遙かなる過去の生活の喜びと悲しみを伝えるざれ唄をききながら、つかの間の静かな安らぎの時間を楽しみ、自然で健康な生活感覚の再生を確認するのである。このようなありふれた庶民の幾分か倦怠を感じさせる「普通の生活」は、しかし、ウィンストンのつかの間の夢において、余りにも哀しい散文詩の措調をおびている。この散文詩が逆照射的に浮び上らせるのは、党＝国家の政治神学がすべての個人の外面的行動だけでなく、内面の領域をも支配し奪いとってしまう極限の政治の恐しさであり、政治によって覆い尽され、常に政治の影をひきづっている生活のおぞましきである——操作され増幅された憎悪、金切り声のスローガン、私的領域を許さない社会的＝政治的諸組織のスケジュール活動への強制参加、このような憎悪・強制・演出をそれとして意識しえなくするほどの徹底した思想と感情の改造。オーウェルが、ウィンストンとジューリアの愛の行為、かれらを包む木々の梢のざわめきや鳥の歌声、古ぼけた家具、ものうく聞こえてくる「プロレ」の唄声などのセットを用いることによって、かつてあったかもしれぬと空想し未来にはいささかも予見しえない「普通の生活」を描いたのは、このような政治のおぞましきと恐しさへの告発であったように思われる。ウィンストンが党によって体制化され「管理された異常精神」に対する抵抗の精神的な核を獲得し、言葉と意識の縮少による内面支配のメカニズムに反抗する人間的再生の思想を回復するのは、「普通の生活」に息づいている「正気」の感覚を共有するときであった——

ウィンストンは自分を取り巻く静寂さにふと気がついた。人々が何か新しい物音に気づくかのように、ジューリアが暫く前からひどく静かにしているように思われた。彼女は身を横にして眠っていたが、腰から上は一糸もまとわず、片方の掌の上に頬をのせて、一房の黒髪が眼のあたりまで振りかかっていた。胸もとは規則正しく上下していた。

「ジューリア」

返事がない。

「ジューリア、起きているのかい？」

返事がなかった。彼女は寝入っていたのだ。(中略)

沈みゆく太陽の黄色い光が窓から斜めに差し込んで、枕元に長い影を落した。彼は顔を閉じた。自分の顔の上で、そして自分の体に触れているすべっこい女の肉体に降り注ぐ陽差は、安心しきった強い眼気を催させた。彼は安全だった。何もかもうまくいっている。彼は深い眠りに陥りながら呟いた、「正気とは統計的なものじゃないんだ」この言葉のなかに、彼は深い叡智が潜んでいるように感じた。(Ibid.)

2足す2は5ではないのだという単純な事実、この単純な真理をいえる自由のなかにこそ「正気」はある、これは「普通の人々」の「叡知」だ、そうウィンストンは夕陽のさしこむ静寂のなかでつぶやく。それは、「5ヶ年計画を4年で」と叫ぶ強制的、指令的な計画経済体制の戦略に抵抗する民衆理性である。それはまた、強制労働収容所への追放と粛清（オセアニアでは「蒸発」と呼ぶ）を伴う過剰な政治の恐ろしさとおぞましき、「体制化された異常」に抗する「正気」の感覚である。

だがこのような「普通の生活」の散文詩が過去と未来から切断され、孤絶した秘密の空間のなかでつぶやかれたように、主人公ウィンストンのつかの間の幸福は絶対の幻想と化し、永遠の憧憬となる。それはまた、己れを精神を生かし続けて2足す2は4になるという秘儀を後世に伝え、そのことによって未来に参加しようとするウィンストンの秘かな抵抗が、思想警察によって打ち碎かれることを暗示しているかのようである。じっさいこの幻想は、「迫りくる死という冷厳な事実」によって支えられていた。ウィンストンの幻想は、例えば「ガラスの文鎮」のメタファーによって示される――

ウィンストンはそれから数分たっても起きだそうとはしなかった。室内は暗くなりかけていた。彼は明るい方向に姿勢を変えてガラスの文鎮をじいっと眺め入った。その見飽きないところは、内蔵する珊瑚のかけらではなくて、まさにガラスの内部そのものであった。そこには引き込まれるような深みもあったけれど、それでいて空気に近い透明さも存在していた。ガラスの表面は弓形の天空に似ており、完全に大気もろとも小宇宙を包みこんでいるかのようにであった。かれはその中に入っていけるような気がした。いや事実、マホガニーのベッドや折畳式テーブル、置時計、版画、文鎮そのものと一緒に、その中に入っているような気がしたのだ。文鎮はかれが入っていた部屋であり、珊瑚のかけらはジュリアと自分の命として、いわば水晶体の中心にあって永遠のものとして化しているのだった。

二人とも――ある点で、ついで頭を離れたことはないが、こうした今の状態が長続きしな

いであろうとは百も承知していた。迫り来る死という冷厳な事実が、二人の横たわるベッドと同じく確かなものに思えてくる時もあった。そして彼らは絶望的な情欲に駆られながらお互いにしがみつくのだった。運命の定まった人間が最後の時を告げる5分前に、残されたひとかけらの楽しみにかじりつくようなものである。それでいながら、自分たちの間だけは安全であるばかりでなく、永久に続くものだという幻想に取り憑かれることもあった。現にこうして部屋にいる限り、どんな危害も自分たちには及ばないだろうと、二人ともそう考えていた。この部屋まで辿りつくのは難しく、しかも危険を伴ったが、いったん部屋の中に入ってしまうれば聖地であった。それはあたかもウィンストンが文鎮の中心部を凝視して、ガラスの世界の内部にのめりこめるという感じを抱き、しかも一度その内部に入ってしまうれば、時の動きさえ止められるような気がするのと同じことであった。(Ibid.)

ウィンストンと恋人ジュリアは、すべての忠誠が一元的に国家に集中されている社会において愛と配慮がますます困難となりつつあるが、未だ完全に不可能ではないと信じたがった。しかし、二人は自分たちの情事のあと語り合い、いずれは発見されて苛酷な拷問にかけられるであろう、と予想する。ある日、「やつら」は我われを逮捕するだろう——とウィンストンは言う——、そして我われは無力となるだろう。しかし——

「ただ一つ重要なことは、僕たちはお互いに裏切ってはならないということだ。もっとも裏切らなかつたとしてもなんの変わりもないけれどね。」

「自白のことをいっているのなら」と彼女は言った、「私たちはきっと自白すると思うわ。誰だって必ず自白するものよ。仕方がないわ。それに彼らは拷問にかけるしね。」

「僕は自白のことをいっているんじゃない。自白は裏切りじゃないんだ。君がなにをいい、なにをしようと、そんなことは問題じゃない。感情だけが重要なんだ。もし彼らが僕に君を愛することを止めさせることができたなら——それこそ本当の裏切りなんだよ。(What you say or do doesn't matter : only feelings matter. If they could make me stop loving you — that would be the real betrayal.)」

彼女は考え込んだ。「そんなことできやしないわ」彼女はやっと口をひらいた。「それだけが彼らにできない唯一のことよ。彼らはあなたにどんなことでも——そう、なんでも——喋らせることはできるでしょう。でもそれをあなたに信じさせることだけは不可能だわ。あなたの心の中にまで入ることはできないのよ。(they can't make you believe it. They can't get inside you.)」

「そうとも」 彼は前より幾らか希望をもっていった、「そうとも、まったくそのとおりだ。彼らは君の心の中まで入り込むことはできない。もし君が人間的であり続けることは価値のあることだと感じることができるなら、たとえそこからなんらよい結果がでなくても、彼らに打ち勝ったことになるんだよ。(If you can feel that staying human is worthwhile, even when it can't have any result whatever, you've beaten them.)」
(Ibid. 傍点は引用者による)

だが、ウィンストンは逮捕された。権力機械であるオブライエンによって拷問にかけられた。そして、「愛情省 (ミニラブ)」での公開裁判のあと、長い間待ちわびていた弾丸が自分の頭蓋骨を貫いたとき、彼は「偉大な兄弟」を愛していた。彼は、「ヨーロッパ最後の男」(『1984年』についてオーウェルが当初考えていた原題)であった。

〔編集後記〕

このところ精力的に「オーウェル」研究に取り組み、次々に労作を公表されている小沼所員から、その一環をなす論稿をいただき、今年度の最終号を刊行することができた。入試その他の業務に追われる繁忙期にもかかわらず研究に取り組みられた小沼所員の労に敬服するとともに、編集子としての任を果たさせていただいたことに感謝する次第である。(B.K.)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-8480(内線33)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)404-2561
